

第9回

秀麗富嶽十二景写真コンテスト

入選作品

最優秀賞

冬日 奈木 正次（静岡県沼津市） 大蔵高丸・白谷ノ丸



白簾史朗氏講評

「冬日」というより「晩秋の昼」というような題名の方が、情景にぴったりするのではないかと思う。それにしてもみごとな作品だといえる。淡く霧氷の付いた疎林で画面下方3分の2を埋め、上方に配した富士の雪肌の描写が抜群である。ただ単にかつきりと鋭いだけでなく、大気の立ち昇りによる柔らかさがなんとも言えない。いっさい無駄のない構図、調子の美しさ、ただ単に色彩による派手さはないが、作品的に一等地を抜いた秀抜さがある。

推薦

静寂の朝 井上 和夫（山梨県大月市） 扇山



白簾史朗氏講評

これもまた実に美しい画調であり、まさに夢の如き情景の再現である。赤く焼ける富士の雪肌、雪をまとった中景から遠景の山波、そしていま光に浮き出し初めた手前の樹林。これまでの氏の作品はとにかく朝にしても、日中の作品にしても、やや雪肌が飛んで質感に欠けるきらいがあったが、この作品はまったく新しい切り口による氏の新しい表現といえる。この豊かな階調こそ、これからの氏の目指し完成させるべき方角と思われ、改めてエールを送る。

推薦

悠然と聳ゆ 伊藤 茂（静岡県駿東郡） 百蔵山



白簾史朗氏講評

これもまた素晴らしい作品である。黎明の富士山として、これ以上の色彩再現は困難と思われる。中部のハーフトーン、下部の黒い山影が画面をみごとに締めている。「悠然…」という題名がちょっとそぐわないのが残念で「いま富士明ける」的な表現が欲しい。こうした題名の付け方でその作品を見る人により以上、その時の雰囲気を知らせることができる。しかし、素晴らしい。

特選

遊雲 遠藤 潤（山梨県東八代郡） 姥子山



白簾史朗氏講評

やはり題名に少し難があるのが残念。こうした形状のくもは遊雲とは呼ばない。遊雲とはポッカリ、ポッカリ浮かんでいる雲のことであり、少々異なる。しかし、雪のない富士山、色彩に乏しい画面に、この雲は実に生きている。この雲がなければ画面は暗く冴えないだけのものになってしまう。雲の入れこみ方もいいが、その雲で送電塔を隠すという芸の細かさも作者のセンスである。

特選

秋景 岩田 修二（静岡県駿東郡） 大蔵高丸



白簾史朗氏講評

富士山に雪もなく、一見地味に見える作品であるが、朝の色付きの木立ちと大気の中にうっすらと浮かぶ富士山との濃淡の調子が実に美しい。構図的にもまったく無駄がなく、手前の光の当たった部分に対する富士山との関係が絶妙である。スローシャッターのため、中景の木立ちが少しブレていることさえ除けば、他に難くせがつけられない。いつどのような場合でも、本人の精進で作品はできるものだという実証である。

特選

岩殿の空 加藤 泰郎（山梨県大月市） 岩殿山



白簀史朗氏講評

魚眼レンズの特性を生かしてのユニークな画面。ひとつ画面に岩殿山の鏡岩、富士山、太陽と三題話みたいに入れこんでいる。地元とはいえ、この着眼点は秀逸である。でき得れば、もう少し露出値を上げて太陽の光芒をハッキリさせるとよい。長年の努力が実ったといってよい斬新な感覚にあふれた作品。

入賞

ミツバツツジ咲く

高津 秀俊（山梨県大月市）

雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

この構図の作品、それもミツバツツジと富士山の作品は数点あって、花の大きなもの、遠景のもの、いろいろあっても、この作品が一番類型を脱していた。左手前のツツジと右上部の富士山とで、典型的ないの字三角構図が形成されていて安定感がある。色彩的にも暖系色のツツジ、冷系色の富士山とでの反対色配合となってあざやかである。やや水平に注意したい。

入賞

雪雲焼ゆる 八巻 長子（山梨県中巨摩郡） 姥子山



白簀史朗氏講評

朝の色づきの雲、それが強風に吹きなびくのをスローシャッターで流動感を強調しての情景。とはいっても、その場の条件では、その点でデーターのシャッタースピードほか、すべて架空のものといえる。こうした点は厳に注意したい。データは正確に記入していただきたい。構図的には上部が少し空きすぎ、やや間がぬけて、富士が低くなってしまっている。

入賞

朝雲染まる

奈木 正次（静岡県沼津市）

牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簀史朗氏講評

最優秀賞に匹敵する高度の作品。富士山の位置、雲の位置、空部のあけ方、全体の調子、すべてに亘ってまさしく間然するところないみごとな出来といえる。同時に撮影された他作者の作品はこの作品のため、残念ながら落選の憂き目にあった。だが、これだけのものを見せられるとあきらめも早い。

入賞

晩秋

乙黒 美佐枝（山梨県中巨摩郡）

小金沢山



白簞史朗氏講評

やや雑然としている感があるが、この場所で、よくこれだけにまとめたといえる。もう少し視点を高くして横位置とした方がよかったと思われるが、そうした場合、左方の雲が生きてひろがりが出たと思う。やや空部が広くなりすぎ、山の高さが減じてしまった。

入賞

冬の訪れ 茂木 堅市（静岡県清水市） 大蔵高丸・白谷ノ丸



白簾史朗氏講評

安定したいの字構図と色彩の妙、明暗の対比とバランスがすばらしい。特選となってもおかしくない作品だったのに残念である。初応募、初入選の作品であり、そうした点、今後が非常にたのしみといえる。ことに左方の茂みのあつかいがよい。

入賞

雪晴れ 天野 昭吾（山梨県大月市） ハマイバ



白簾史朗氏講評

もう少しデータを正確に記入してほしい。何となく投げやりである。作品としてはこの上ない好条件下での撮影であり、的確な描写ではあるが、左右のバランスが少々悪い。富士山の向きに対して、後方が空いているのはバランスを失っていて、右下の茂みはちょっとうるさい。これが逆の組み合わせならもっと上位のものとなった。

入賞

霊峰富士

高橋 利延（神奈川県相模原市）

笹子雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

視角的に不利な笹子雁ヶ腹摺山から、実にうまく周囲を整理して富士山を捉えている。ただ題名があまりにありきたりでつまらない。それに富士山の大きさはよいが、色彩的にもっとあざやかな赤か、純白の姿でないところした「霊峰…」という形容にそぐわない。ただ全体のバランス、調子は良好といえる。

入賞

富士麗し 小谷 哲朗（三重県松阪市） 奈良倉山



白簾史朗氏講評

この作品も撮影地から見ると実にうまく捉えている。全体の色調も調子も申し分なく、端麗な富士山をよく表現しているが、やや全体に小さくまとまりすぎている。手前の山体も富士山も、もう少し大きく入れこんだ方がよい。ことに右隅の三ツ峠のアンテナの光っているのがじゃま。こうしたものは引伸ばし時にカットすべきである。

入賞

雲海の彼方に 山田 岑士（山梨県大月市） 扇山



白簀史朗氏講評

やはり少し題名に難がある。このような雲は雲海とは呼ばないので、別の形容が欲しかった。「山頂新雪に彩られる朝」といったような題名の方がぴったりの情景となる。地元作者によるそれぞれの表現は、今回特にそれぞれ独自のものがあり感服するが、さらに精進していただきたい。

入賞

木ばな咲く扇山 竹田 辰巳（山梨県大月市） 扇山



白簾史朗氏講評

こうした好条件に遭遇し、それを捉えることができるのが地元の強味であるが、そのためには不断の努力と勤勉が必要とされる。まことに美しい調子で文句のつけようがないようであるが、もう少し下方と右方、それに上部と左方をほんの少し切ることによっていちだんと見ごたえあるものとなったろう。

入賞

朝日をうけて 坂井 康朗（東京都練馬区） 扇山



白簾史朗氏講評

なかなか美しく仕上げている。扇山中腹の木立ちが朝日を受けた状態をうまく明暗のバランスよく捉えたセンスは捨てがたい。ただこの美しい調子の作品にしては富士山が左方に片寄りすぎ、空が広すぎる。左方と上部を少しずつ切るとすばらしいものとなる。

入賞

初冬の朝焼け 北沢 清行（山梨県大月市） 百蔵山



白簾史朗氏講評

このところ地元作家の精進努力の跡はすばらしいが、この作品もそうだ。実際には1月撮影なので初冬とはいえないが、雪が少ないため、この題名でいいと思う。画面に対する富士山の大きさ、下部の取り入れ方によって壮大な朝富士となった。むずかしい季節の富士山をよくまとめている。

入賞

淡雲の朝 瀬瀬 麻實（岐阜県多治見市） 岩殿山



白簾史朗氏講評

このところ現象に対していろんな造語が作られるが、あまり実際に即したものは無い。この場合もそう思えるので、何か他の形容が欲しかった。富士山の大きさ強さに比して空部と雲が少々弱い。富士の条件は良好であるので、もう少し山体を小さくし、空部を大きくとる必要があった。

入賞

晩秋の朝 内藤 元次（山梨県大月市） 高畑山



白簾史朗氏講評

バランスよく朝の富士山をまとめていて、なかなか美しい。中景の雲も平坦ではあってもそれなりに調子よく、富士山の副材として生かされている。ただ、右手前の山体と中景山体が大きすぎ、富士山の美しさを損ねている。それぞれ少しずつトリミングすることによって富士山の美しさはより強調される。

入賞

山かつら 境 実 (神奈川県相模原市) 九鬼山



白簀史朗氏講評

どういう意味か題名の意味が不明である。題名というものは万人その意味を理解できるものが望ましい。作品は美しく、十分に条件を生かしているといっ
てよいが、題名の点で損をしている。富士山が左方に少し寄りすぎているのでその
点を修正した方がよい。

入賞

光る山稜 瀬瀬 浩恭 (岐阜県多治見市) 高川山



白簀史朗氏講評

富士山への題名は、他のアルプスや山々に対するようなものでなく、たとえば「富士雪肌光る」とか、「富士に光あり」のようなつけ方をしたい。せっかくの美しい富士山の印象が大きくマイナスとなる。さらに下方の集落の反射は不要物で、これらを省いて山体を大きくした方がよかったろう。

入賞

初雪

松里 房子（東京都板橋区）

本社ヶ丸



白簾史朗氏講評

これまた題名がぴったりしない。初雪というものは清新な印象をあたえるものであるからもっと面積も大きく、かがやきや白さがほしい。現実には初雪であっても、この場合、そう名付けない方がよい。手前の松のボケを大きくカット、富士山と雲のみでまとめるようにした方が、明るい画面となって、雪そのものも生きてくる。

入賞

雪化粧 佐野 和彦（静岡県庵原郡） 清八山



白簾史朗氏講評

これは新雪の感じが実によく出ていて、降雪直後であることがよくわかる。調子も良好で、構図もまあまあである。ただ、上部空きすぎ、左方が少し間がぬけている。左方と上部を少しずつ詰めると、さらに雪が生き、高度感が強調される。

総評

審査員長 白簾史朗

暖冬冷夏という地球的規模の気象異常がわざわざいして、このところ数年来、ずっと雪が少なく、ことに秋から正月にかけては富士山は山肌が露出し、登山道や山小屋があきらかに望める、いわゆる美しくない富士山の姿しか見ることができなかつた。

それにひきかえ、この第9回コンテストに入る前、秋から12月にかけて異常に雪が多く、久方ぶりに白雪に粧われた富士山が青空のもと聳えて人びとを、そして富士山写真愛好家をよろこばせた。見方によればこれも異常といえ、西高東低の冬型気象配置での降雪でなく、秋になっても太平洋側からの低気圧が浸入したための雪である。しかし、久々に雪白の富士山をあおいで、勇躍山に登った人も多かつたらうと考える。

第9回の応募者総数57名、これは前年比でプラス1名、応募作品数239点、こちらは前年比でプラス10点である。応募者中、初めての応募は15名、2度目の応募が9名、1回から9回まで、全回通じての応募は4名、1回だけ休みが5名、2回休みが3名であり、全体的に見て初回応募が大幅に増えている。

応募者数は第1回から第9回まで、44名、29名、59名、51名、49名、53名、50名、56名、57名であり、今回は第3回の59名に次いで2番に多い。

応募作品数については、第1回から今回まで、87点、78点、168点、175点、195点、220点、219点、229点、239点であり、今回がもっとも多くなっている。

ここで特徴的なことは大月市内在住者の応募者数の伸びが少なく、山梨県内在住者はほぼ横這いであるのに対し、県外からの応募が漸増し、今回作品数で115点という最高の数を示したことである。

応募作品の山頂別に見ると、初回から1番山頂の雁ヶ腹摺山がコンスタントに数を集めているが、次いで3番山頂の大蔵高丸が増加し、今回最高数を記録した。1番山頂サブの姥子山、2番山頂サブの牛奥ノ雁ヶ腹摺山と2番山頂小金沢山は依然として少数であるが、しだいに数をのばしてきているのに気付く。だが、4番山頂の滝子山、笹子雁ヶ腹摺山は増加の傾向が見られず少数のままに止まっている。他の山頂も大体、似たりよつたりの数であるが、今回は9番の倉岳山がゼロであり、笹子雁ヶ腹摺山は1点のみであった。他に3点の山頂12番の本社ヶ丸、4点が姥子山と滝子山、5点が10番の九鬼山であった。

各山頂の作品が多いところは競争が激しく、ダブル入選のチャンスもままあ

る反面、競り合いで落とされる確率も高い。そうした点、少数応募の山頂は入選確率が高くなるという利もあるわけだ。

だが、全体を見ると作品の質は確実に向上しており、以前とくらべるとまったく隔世の感がある。応募数の多い山頂にいたっては第1次審査から第4次まで行い、細部までの検討を経てのち、各賞を決定する。

作品のクオリティは大幅に向上したといっても、まだまだ改良すべき点は多く、ことに構図の点では相変わらず“お子様お絵描き”的が多く、富士山を画面中央に位置させているものが多く、構図に方向感や動き、発展性がない。それと富士山の雪肌が白く飛んで質感の消滅している作品が実に多いことも目立つ。全体に暗いもの、明るすぎるものなど、露出の間違いや引伸の際のラボの技術未熟による作品もある。前回まで指摘したカラーネガによる色彩再現の不利な印画はやや影をひそめたようだが、まだまだ伸ばしっ放しといった作品も見受けられる。

構図の点では自然の中から自分のカメラアイとレンズ焦点距離の写角によって切り取ることが第一義とされるが、条件によってそれが不可能な場合は、第二義技法として、引伸ばしの際にトリミングで画面をととのえることも重要なファクターである。そのためには何よりも構図法の勉強が必要とされる。露出の不備も、この構図の作り方によって明暗の差を少なくし、全体の調子をそろえることも撮影技法うちに入る。

こうしたあらゆる方面から検討し、その関門をくぐりぬけた24点の作品が残った。やはり数多く応募し、修羅場をくぐってきた応募者が今回も大多数を占めたが、初回応募での入選が2名、3回目の応募での初入選が1名、計3名の初入選があった。ことに地元大月市からは8名の入選者を出したことは初めてで、地元にとっては大きな収穫といえよう。

最優秀賞はすでに同賞3回受賞の奈木正次氏の手落ち、同時に牛奥ノ雁ヶ腹摺山の作品がダブル入選した。この入選作品も最優秀賞に充分値する高度の作品で、同氏の他の作品もみな捨てるに惜しい秀作ぞろいだった。

推薦はやはり、すでに推薦1、特選2の井上和夫氏のものとなり、これまでと異なる切り口は次回の秀作を十分に期待させるものであった。もうひとりの推薦は入選1回の伊藤茂氏、氏は4回目の応募である。

特選3名は岩田修二、遠藤潤、加藤泰郎の3氏。岩田氏は、過去、推薦1回、遠藤氏は推薦、特選各1回、入選は4回のベテラン作家である。加藤氏は大月市在住作家で入選6回、今回は特選をものにした。

入選はやはり大月市在住の、高津秀俊氏。氏は推薦1、特選2、入選2のベテラン八巻長子氏は推薦、特選、入選各1回。乙黒美佐枝氏は初入選、小金沢山からの作品である。おなじく初入選の茂木堅市氏、惜しくも入選に止まったが、充

分特選に匹敵する作品で、次回に期待する。入選4回の天野昭吾氏は5回目の入選、右手のアウトフォーカスが惜しい。

第7回の最優秀賞作家、高橋利延氏は今回は入選、だが他の作品も入選上にある力作ぞろいだった。小谷哲朗氏は2回目の入選。坂井康郎氏も同様2回目、竹田辰己氏は最優秀賞1回、入選3回の作家である。

山田岑士氏も2回目の入選。特選1回、入選4回の北沢清行氏は今回も残念ながら入選に止まった。

瀬瀬麻實氏は3回目応募での初入選、内藤元次氏は2回目の入選、境実氏は特選2回、入選3回、入選計4回となった。瀬瀬浩恭氏は特選1回、入選は3回目となる。

松里房子氏は特選2回、入選4回、女性作家としてもっとも気を吐いている。佐野和彦氏は3回目の入選となった。

こうしてみるとやはり、過去、高位の入選を果たした作家が多く、それぞれ独自の作風を形成して個性豊かな作品を出品されているのがわかる。

最後にお問い合わせがするが、応募票への記載は必ずきちんとおこなっていただきたい。今回入選された作家はすべてこうした規則をきちんと守って応募されている。これらのことは作品を創る上でも大切な実行要項ということをよく理解し、第10回に臨んで欲しい。ことに来年は第10回、大きな節目となる年であるので選者としても大きな期待を以て応募をお待ちしている。